取組の概要

１．取組の目的

本学の人材養成目的は、「英語を中心とした言語運用能力の向上を図るとともに、日本と世界のなかで交流するときに求められる人間力と教養を高め、実践的な職業人又は国内外の学士課程教育でより高度な専門性や教養を考究できる人材の育成」である。（学則第２章第２条）この目的を達成するため、また短期大学部の英米語学科への一元化を機に、カリキュラム改革を実施し、３コース制を導入した。さらに新たな取組として「**Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス**」により**基礎的人間力の向上**をはかると共に、**英語力レベルアップのためのツールとして「ＩＣＴを利用した英語授業外学習システム」**を開発運用する。そのベースの上に「**全員留学制度**」**によって、さらなる英語力レベルアップと国際理解の深化**をめざす。

２．取組の概要

(１) Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックスによる基礎的人間力の向上

卒業後の多様な進路（就職、進学等）を視野に入れ、常識・マナー・コミュニケーション能力等ジェネリックスキル（一般的・包括的な生きる力）を身に付けさせ、総合的な「基礎的人間力」の向上を図る。具体的な目標は、以下の５つである。①学生生活を有意義に送るための情報及び学ぶための方法や知識の修得。②学生（将来の社会人）としての基礎的な常識、マナー及びコミュニケーション力を身に付ける。③人権に対する正しい認識を持ち、他人の立場を大切にする。④日本に関する知識及び世界に関する知識を備えた地球人になる。⑤自己を分析し、将来について考える

新入生全員をクラス分けし、専任教員がクラス・カウンセラーとして、週１回は学生と顔を合わせ、授業を行うと共に、授業外でも様々な相談に応じる。授業計画の中には、クラス・カウンセラーの授業のほかに、内部・外部講師による講演、各種ガイダンス（進路ガイダンス、生活指導ガイダンス、図書館ガイダンス、キャリア・ガイダンス）も組み込む。

(２)ＩＣＴ利用の英語授業外学習システムの開発と運用－単位の実質化

授業前後の学習時間を確保し英語授業の単位の実質化を図るため、学生自身が授業外に自主学習を進めやすくするツールとして、ＩＣＴを利用した授業外学習システムを開発し運用する。具体的には、①Ｗｅｂを利用した本学オリジナル「Listening & Reading Online」によるリスニング、リーディングの自主学習プログラムの開発運用、②携帯電話を利用した英文法、英単語の自主学習プログラムの産学協同による開発運用である。

(３)全学生留学制度

学生の留学ニーズに応え、学生の英語運用能力と国際理解の向上を目的として、本学の 50 カ国・地域 314 単位互換提携大学のグローバル・ネットワークを基盤に、全学生留学制度を新たに設けた。派遣先大学での授業料を本学が負担する、5～15 週間の４種類の留学プログラムを設定。派遣予定国は、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの４カ国。

(４)卒業までの修得目標

全学生が、英検２級以上、ＴＯＥＦＬの１００点スコアアップ、ＴＯＥＩＣの２００点スコアアップを実現する。

（様式２）

１　教育の質の向上への大学等の対応について

（１）人材養成目的の明確化

①人材養成目的の学則等における規定について

平成 19 年の短期大学設置基準の改正（文部科学省令第 22 号）に基づき、学則を改正し、本学の学科の人材養成目的等に関する事項を規定した。

学則第２条第２項「本学科は、英語を中心とした言語運用能力の向上を図るとともに、日本と世界のなかで交流するときに求められる人間力と教養を高め、実践的な職業人又は国内外の学士課程教育でより高度な専門性や教養を考究できる人材の育成を目的とする。このために必要な具体的な達成目標を学生の就学目標や習熟度等に応じて定め、学生に明示するものとする。」

これは、本学の自己点検・評価報告書等で既に示してきた従前からの考え方を学則に明文化したものである。

②学生に修得させるべき能力等について

(ｱ)コミュニケーションツールとしての言語運用能力

(ｲ)日本と世界のなかで交流するときに求められる人間力と教養

(ｳ)実践的な職業人又は国内外の学士課程教育でより高度な専門性や教養を考究できる能力

③卒業認定・学位授与、カリキュラム編成、入学者受入れのポリシーを踏まえた実施・展開について

(ｱ)入学者の選抜に当たっては、一定レベルの学力を備え、語学の好きな、様々な資質を持った学生の確保をめざしている。

(ｲ)本学は従来から、短期大学部の２年間を幅広い分野への進路の「ファースト・ステージ」ととらえて、学習習熟度別クラス編成による高度な英語運用能力の修得とともに、国内外の４年生大学への編入学、実社会での活動の基礎となる専門知識の修得を目指してきた。

短期大学部の英米語学科への一元化を機に、カリキュラム改革を実施し、平成 20 年度から、卒業後のより多様なキャリア選択を見据えた３コース制をスタートさせ、学習目標をより明確にできるようにした。この３つのコース制は、学生の学修ニーズと希望進路に合わせ、２年間を通じ専門知識を最大限に伸ばすように工夫した。

◆アカデミック・プレップコース

・・・本学外国語学部、国際言語学部や国内外の他大学への編入学希望者、英語教員希望者等に特化したカリキュラム

◆ビジネス・キャリアコース

・・・製造業、貿易商社、証券、銀行業等への就職希望者等に特化したカリキュラム

◆ホスピタリティ・プラクティスコース

・・・航空、旅行、ホテル、サービス業等への就職希望者等に特化したカリキュラム

(ｳ)さらに、入学生の実態を踏まえて、学生（将来の社会人）の基礎的人間力の向上をめざし、平成 20 年度より新入生を対象に必修の授業科目「Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス」を新たに開講した。

また本学の人材養成目的である「英語を中心とした言語運用能力の向上を図るとともに、日本と世界のなかで交流するときに求められる人間力と教養を高める」ため、本学の 50 カ国･地域 314 単位互換提携大学のネットワークを活用して、平成 20 年度から、派遣先大学での授業料を本学負担とする「全学生留学制度」をスタートさせた。

(ｴ)卒業時に修得すべき英語力レベルとして、英検２級以上、TOEFL（入学時から１００点スコアアップ）、TOEIC（入学時から２００点スコアアップ）を設定している。

（２）成績評価基準等の明示等

教育効果を期すため、専門必修科目を中心に各科目の講義内容や到達目標等を明記した講義概要を科目コーディネーターが作成、シラバス作成依頼時に各授業担当者に配布している。シラバスに記載する項目は、「講義題目」「講義概要」「到達目標」「受講に関しての注意事項」「評価方法」「教科書」「参考書」「授業計画」としており、特に単位の実質化を図るための授業外学習時間の確保を考慮してシラバスを作成することとしている。

シラバス作成時に、評価基準については評価項目及び評価配分を明記することとしている。また、授業において更に詳しく学生に評価方法を説明することとしている。卒業の認定に当たっては規程を厳格に適用している。

（３）ファカルティ・ディベロップメントの実施

平成 20 年度から大学におけるＦＤ活動の組織的取組の義務化を機に、本学では新たに「ＦＤ委員会」を組織し、制度に基づく組織的かつ全学的な取組を進めることとなった。

個々の授業を一層充実したものにするために、ＦＤ活動を通して、各自が互いの授業実践に関する知見・情報を交換しあう。社会や学生のニーズに応え、基礎学力の充実と目的意識を培わせることを通して、学生の満足度を高めることを目指す。

具体的な活動内容は次のとおりである。

①「授業研究」の開催

現在の学生には、学習意欲喚起と自立性の育成を促すつもりの極度な突き放しは「学びからの逃避」を助長しかねない。現状追認による spoonfeeding ではなく、「生徒」から「学生」への移行を助ける各授業の「目標の設定」と「目標達成のための授業運営」の工夫・研究が求められる。セメスターを通した授業を成功・要改善などの視点から各教員が自己の実践を目標に照らし、学生の反応とも合わせて省察し、得られた知見がまとまり次第発表・交換する。効率的な研究協議を進めるために原則として授業ビデオ等を活用する。授業者は公募する。

②「授業改善アンケート」の実施

現在年 2 回行われている「授業評価」を、より効果的なものにするために実施する。「授

業評価」の集計結果が、授業改善にどう生かしているのか。その実態を知るために全教員に対し毎年２回「授業改善アンケート」を実施する。この結果は『関西外大ＦＤ News Letter』や教育研究年報で報告する。

③「公開授業」の実施

各セメスターにおいて１週間程度、すべての授業を公開する。参観者は「授業改善ための建設的なコメント」を書いて授業者に渡す。『関西外大ＦＤ　News Letter』に掲載する

④「ＦＤワークショップ」の開催

本学教員の有志が「私の授業実践」「私の授業改善の試み」といったテーマで発表し、その内容をめぐって出席者同士で意見交換をする。発表者は公募する。

⑤「ＦＤシンポジウム」の開催

統一テーマのもと、複数の教員が授業の実践例を発表し、フロアとの質疑応答を通して、授業改善の方法を探る。これを全学規模（全教職員及び学生の参加）で実施。テーマ及び発表者は公募する。

⑥「ＦＤ講演会」の開催

ＦＤ講演会の内容は『関西外大ＦＤ　News Letter』などで公表する。

⑦『関西外大ＦＤ　News Letter』の発行

ＦＤ活動の理解と啓発のために、年４回程度発行する。本年度は初年度で５回発行の予定。

（４）自己点検・評価等の実施体制・展開と評価結果の反映

「関西外国語大学短期大学部自己点検・自己評価実施要項」に沿って自己点検・自己評価委員会（以下自己点検・評価委員会）および専門別点検・評価委員会（以下、専門別委員会）を設けた。自己点検・評価委員会は、自己点検・評価の作業を統括するとともに、評価結果の有効活用を図るもので、学長、教務部長、学生部長らの教学部門のスタッフと理事長、副理事長、事務局長らの事務部門スタッフで構成している。

専門別委員会のメンバーは、自己点検・評価委員会が指名し、専門部門の領域について点検・評価を行う。点検・評価する部門は教務委員会をはじめ学生部委員会、入試委員会、留学生選考委員会、人事委員会等多岐にわたり、月に 2 回開催している。

大切なのは結果の活用である。自己点検・評価委員会は、専門別委員会の評価結果を総括し、理事会に報告すると同時に次年度に向けて新たな目標を策定する。理事会はこれらの報告に基づき、必要な部局に改善、改定を指示する。また点検・評価結果を学内外に公表し、全教職員の協力を求めて教育環境の改善、充実を図ることにしている。

毎年続けている自己点検・評価であるが、平成 5 年に初めて「教育研究年報」にまとめた。さらに平成 8 年にはその後の 3 年間の自己点検・評価の結果をまとめ、「関西外国語大学 50 年史」に取り入れるとともに、第三者評価機関としての大学基準協会の第 1 回相互評価を受けた。平成 12 年には「教育研究年報第 2 集」を作成、公表している。更に平成 17 年度には短期大学基準協会の第三者評価（認証評価）を受け、平成 18 年には「教育研究年報第 3 集」を作成、公表している。

（様式３）

２　取組について

（１）取組の趣旨・目的

①取組の背景・社会的ニーズについて

(ｱ)大学全入時代の到来と受験生の四大シフトを踏まえ、平成 20 年度から国際コミュニケーション学科の募集を停止し、中宮学舎の英米語学科に一元化した。この再編を機にカリキュラム改革を図るため、一年間教務委員会で検討を進めてきた。

(ｲ)学生のニーズが多様化する中で、学修目標をより明確にできるよう、卒業後の多様なキャリア選択を見据えたカリキュラム編成の必要が出てきた。

(ｳ)大学全入時代の到来を控え、今まで以上に多様な学生が短期大学に入学するようになった。そのような社会の中で、学生の学力の向上はもとより、いかに社会人としての基本的な素養と知識を備え、規律を守り、自発的に行動できる卒業生を送り出せるか、が今まで以上に重要になってきた。

ところが、従来のような授業や各種ガイダンスだけでは、本学の人材養成目的を実現し、社会が必要とする人材を育てることが非常に困難になっており、新たな対策を講じることが急務となってきた。

(ｴ)従来から学部学生にについては、拡充してきた留学制度と留学実績であったが、短期大学部の学生にとっては、２年間という短期間の在学期間、留学費用負担、就職活動との時期的重なり等が制約となり、十分な運用を妨げてきた。しかし、留学によって国際理解や英語の実践力を身につける意義は大きく、学生のニーズも強かった。

(ｵ)留学が学生の英語運用能力向上に果たす役割は大きいが、その留学をさらに意義あるものにするためには、その基礎となる英語運用能力の修得が必要である。英語運用能力向上のためには、授業での学修はもちろん、学生自身の不断の自習努力が必要であり、その努力を促す自習環境を整備する必要がある。

②取組の学生教育の目的と成果に関する具体的な目標について

[1] Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス

卒業後の多様な進路（就職、進学等）を視野に入れ、常識・マナー・コミュニケーション能力等ジェネリックスキル(一般的・包括的な生きる力)を身に付けさせ、総合的な「基礎的人間力」の向上を図る。

具体的な目標は、

①学生生活を有意義に送るための情報及び学ぶための方法や知識の修得

②学生（将来の社会人）としての基礎的な常識、マナー及びコミュニケーション力を身に付ける

③人権に対する正しい認識を持ち、他人の立場を大切にする

④日本に関する知識及び世界に関する知識を備えた地球人になる

⑤自己を分析し、将来について考える

[2]ＩＣＴ利用の英語授業外学習システムの開発と運用

英語運用能力向上のため、学生自身が自主学習を進めやすくするツールとして、ＩＣＴを利用した英語授業外学習システムを開発し、運用する

[3]全学生留学制度（英語圏への短期留学：留学先授業料本学負担）

学生の留学ニーズに応え、利用度を向上させるため、派遣先大学での授業料を本学が負担する全学生対象の短期留学プログラムを新たに設けた。

学生の英語運用能力と国際理解の向上を目的とする。

[4]卒業までの修得目標

英検２級以上、TOEFL（入学時から１００点スコアアップ）、TOEIC（入学時から２００点スコアアップ）。

③短期大学部の人材養成目的との関係について

本学の人材養成目的は、「英語を中心とした言語運用能力の向上を図るとともに、日本と世界のなかで交流するときに求められる人間力と教養を高め、実践的な職業人又は国内外の学士課程教育でより高度な専門性や教養を考究できる人材の育成」である。（学則第２章第２条）

上記の人材養成目的を達成するため、まず「Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス」により基礎的人間力の向上をはかると共に、英語運用能力向上のためのツールとして「ＩＣＴを利用した英語授業外学習システム」を開発運用する。そのベースの上に「全員留学制度」によって、さらなる英語運用能力の向上と国際理解の深化をめざす。

（２）取組の具体的内容・実施体制等

①取組の目的を達成するための教育課程・教育方法等について

[1] Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス

新入生全員をクラス分けし、専任教員がクラス・カウンセラーとして、週１回は学生と顔を合わせ、授業を行うと共に、授業外でも様々な相談に応じる。

以下の①～④については、各クラス・カウンセラーが授業計画を立て、実行する。

①学生生活を有意義に送るための情報及び学ぶための方法や知識

②学生（将来の社会人）としての基礎的な常識、マナー及びコミュニケーション力

③人権に対する正しい認識、他人の立場を大切にするこころ

④日本に関する知識及び世界に関する知識

具体的には、教科の学習方法、論文の書き方、社会的常識・マナー・コミュニケーションのとり方等の指導を行う。

授業計画の中には、クラス・カウンセラーの授業のほかに、内部・外部講師による講演、各種ガイダンス（進路ガイダンス、生活指導ガイダンス、図書館ガイダンス、キャリアガイダンス）も組み込む。

さらに学生の自発的な学習プログラムとして、以下のものを用意している。

「Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス」アクションプログラム

1)ボランティア推進（教務部）

○地域生涯学習センターとの連携・・双方向の学びあい

○幼稚園・保育所体験ボランティア・・子どもに学ぶ

○シルバー人材との連携・・シルバー世代に学ぶ

○小中学校部活動支援・・放課後活動に学ぶ

2)キャリアデザイン（キャリアセンター）

○インターンシップ(企業体験)・・企業に学ぶ

○アルバイト体験と人間関係・・アルバイトから学ぶ

○ワークショップ(社会体験)・・社会体験セミナー等で理論を学ぶ

3)日本文化研究（国際交流部）

○留学生との交流・・身近な受入れ留学生に「日本語、日本文化を教えることを通して異文化理解を図る」（スピーキングパートナー制度）

○茶道・華道・書道・囲碁・将棋を通じて日本文化を考究する

[2]ＩＣＴ利用の英語授業外学習システム

全員留学制度をスムーズに展開するためにも、基礎的な英語運用能力を具体的に身につけることが必要である。英語の 4 技能（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）向上のためには、学生自身の自習、特にリーディングの量とリスニングの時間を増やすことが重要である。個々の学生のレベルに合わせた素材を探す事は必ずしも容易ではない。また学生が学習しやすい環境を整える必要がある。そこでＩＣＴ利用を前提に、本学のノウハウを投入したオリジナルソフトを開発するとともに、企業との連携により英語の技能のスキルアップを図ることができるようなプログラムを実施することとした。

特に学生全員が保有する携帯電話を利用した英語授業外学習システムは「いつでも、どこでも」学習できる。

本システムの取組にあたり、英語の習熟度別の３つのレベルの学生群(1 学年 100 名)を抽出し、実施する。この対象者は卒業まで固定し、２年次以降プレイスメント・テストで達成度評価を行う。

(ｱ)Ｗｅｂを利用した本学独自のオリジナルソフト開発(Listening & Reading Online)リスニング、リーディングの授業外学習システム

本学のノウハウを投入し、Ｗｅｂ上で利用できるコンピュータプログラムを開発し、そのプログラムに出版社の許諾を得たレベル別のリーディング素材(Graded Readers)を載せる。同時にそのストーリーを朗読したネイティブスピーカーの音声ファイルも出版社から提供を受けプログラムに載せる。音声のスピードは変えることができ、学生はＷｅｂ上で自分の語彙レベルとリスニングレベルに合わせて学習をする事ができる。授業時間外学習として読む冊数を指定し、リーディングレポートを提出させる。

(ｲ)携帯電話を利用した英文法、英単語授業外学習システム

基本的英文法の学習プログラムを企業とタイアップして共同開発し、TOEIC に即した問題を学生の携帯へ配信し学習させる。

英語の 4 技能の向上に正しい文法の知識は欠かす事ができないが、いわゆる「文法書」というものに拒否感を示す学生は少なくない。そこで、本学で作成する TOEIC に即した文法問題を企業と提携して学生の携帯電話へ定期的に配信する。同時に、学生のレベルにあった英単語の問題も毎日配信することで、学生に学ぶ習慣をつけさせる事が期待できる。

本プログラムは個々の学生の学習履歴を担当教員がチェック・フォローできる。

[3]全学生留学制度

希望する全学生を対象に、以下の留学プログラムを設定した。

(ｱ)留学時期・期間

(a)春学期語学留学（3月／4月～6月／7月）　期間：10～15週間

(b)秋学期語学留学（8月／9月～12月）　期間：10～15週間

(c)夏期語学研修（7月～8月）　期間：5週間

(d)春期語学研修（2月～3月）　期間：5週間

(ｲ)派遣予定国　アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド

(ｳ)留学費用　留学先大学での授業料は本学負担とする。

(ｴ)留学中での学修結果に基づき、本学での単位認定を行う。

②取組実現に向けた実施体制（大学としての組織的な取組体制、学外との連携等）

本プロジェクトにおける実施体制として、学長をはじめ、教職員を中核とした実施委員会を設け、取組の企画・運営を行う。

＜実施委員会の構成＞

No.	担当	役職	氏名
1	委員長	学長	谷本　榮子
2	副委員長	キャリアセンター所長・教授	廣本　和司
3	副委員長	ＦＤ委員長・教授	岡澤　潤次
4	委員	教務部長・教授	井登　大策
5	委員	国際交流部長・外国語学部教授	山本　甫
6	委員	教授	宮野　智靖
7	委員	准教授	浅田　忠久
8	委員	同	中島　康博
9	事務局	事務局長	田村　幸男
10	同	教務部　課長	吉川　淳三

（３）取組の評価体制

①申請する取組（取組の達成度）に対する評価体制、方法、指標の設定について

本プロジェクトの円滑な実施のために外部評価委員会を構成し、半期ごとの取組状況や達成状況についての実施状況調査および実績評価を行う。

＜外部評価委員会の予定構成メンバー＞　（順不同）

No.	役職	氏名
1	大阪市教育委員会　教育次長	安藤　公仁
2	枚方市教育委員会学校教育部　部長	村橋　彰
3	在大阪・神戸米国総領事	ダニエル・ラッセル
4	三重大学教育学部　教授	早瀬　光秋
5	南海電気鉄道株式会社　常務取締役	山本　文彦

本プロジェクトの指標として、英検２級以上、TOEFL（入学時から１００点スコアアップ）、TOEIC（入学時から２００点スコアアップ）を設定し、実現を目指す。

②当該評価を取組へ反映させる方法について

外部評価委員会による評価については、プロジェクトの実施状況調査や、参加者等による自己評価を踏まえ総括的な分析・評価を半期ごとに実施し、本プロジェクトの推進に関する提言を得るものとする。

③取組期間終了時における評価体制等について

取組終了時には、まず実施委員会によるプロジェクト総括を行い、その後外部評価委員会にて評価を行う。最終的な評価結果も含め、発表会の開催、印刷物の刊行配布等により、外部へ公表・周知する。

（参考）

①取組に関連する今日までの教育実績

国際コミュニケーション学科の募集を停止し、機能の集中を狙いとして、英米語学科に一元化した。この再編を機にカリキュラムの改革と併行した指導内容の改善を図ることとし、本学の学生の実態を踏まえた「Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス」を一年間のワーキングの討議期間を経て、新カリキュラムの目玉として創設した。

短期大学部の学生にとって、２年間という短期在学期間が制約となり、留学しにくい状況があった。そのため、期間、必要経費等の工夫をし、今年度から希望する全学生を対象とした留学制度を実現した。本学の 50 ヶ国・地域、314 単位互換提携大学のグローバルネットワークを基礎にした、短大生向けのユニークな留学制度である。

②実施体制等の今日までの経緯

学部を含め全学の協力・支援を得た短大全員留学の制度化、ジェネリックスキルを身につける「Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス」の創設が相俟って、教学理念の具現化へ向けて一歩前進してきた。本プロジェクトは、これに加えて短大生が望む語学力の強化のため、ICT を活用した授業外学習システムを組み合わせることで、人間力と語学力を備えた短大生の育成を図ろうとするものである。ICT 活用のプログラムは、検討するなかで既存のものでは不十分なことが判明したため、携帯電話活用関係は関係企業と本学教員が産学協同で追加開発し、パソコン活用関係は本学教員グループにより独自開発することとし、すでに着手している。

これまでの取り組みは、学長が先頭に立って検討を組織し、実現してきた。本プロジェクトの発案も学長で、ＦＤ制度がスムーズに開始されたことも追い風となって、短大全教職員による推進体制が構築できている。高等教育のファーストステージに立っている短大学生に適切なカリキュラムと指導を提供し、希望を持って就職、あるいは進学のセカンドステージに進んでいけるよう、本学の総力を挙げてファーストステージの学びをカタチにしていくこととしている。

（様式４）

３　取組の実施計画等について

①取組のスケジュール及び各年次の実施計画

【２０年度】

(1)Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス

・授業計画の実施

・クラスカウンセラーの協議による授業結果の検証と次年度用指導案の策定

(2)ＩＣＴ利用の英語授業外学習システム

・英語の習熟度別の３つのレベルの学生群（1年次 100名、3クラス）を抽出し、本プログラムの実施対象とする。

・携帯電話へ配信する文法問題の作成、配信開始

・WEBでのリーディング、リスニングプログラムの開発および運用開始

・プレイスメント・テストの実施による検証

(3)全学生留学制度

・短期留学プログラム参加者を対象とする、プログラム評価の実施

【２１年度】

(1) Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス

・20年度に見直した指導案の実施、教育目標との整合性の検証

(2)ＩＣＴ利用の英語授業外学習システム

・英語の習熟度別の３つのレベルの学生群（新1年次 100名、3クラス）を抽出し、本プログラムの実施対象とする。20年度対象とした新2年次 100名・3クラスは引続き対象。

・携帯配信英語文法プログラムの結果分析、見直し、問題入換えおよび追加

・学生からのレポートの収集と分析、コンテンツ追加

・プレイスメント・テストの実施による検証

(3)全学生留学制度

・留学参加者のプログラム評価の分析とその結果の受け入れ大学へのフィードバック

【２２年度】

(1) Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックス

・指導案の最終検証とカリキュラムとしての確定

(2)ＩＣＴ利用の英語授業外学習システム

・20年度入学者（21年度卒業者）の成果検証と22年度対象者へのプログラム実施。

・携帯配信文法プログラムの検証継続と対象者を全学生に拡大する際のガイドライン作成。

・リーディング、リスニングの検証継続と全学生を対象とする際のガイドライン作成。

・プレイスメント・テストの実施による検証

(3)全学生留学制度

・短期留学受け入れ大学の ESL カリキュラムへのフィードバック、提言

②取組に参加する教職員と学生の数

【教職員】のべ２３名

実施委員会メンバー15 名のほかに、顧問、総務部長、教務部課長・国際交流部次長、国際交流部課長、教職英語教育センター所長・図書館情報センター事務部長

【学生】

Ｋ.Ｇ.Ｃ.ベーシックスと全学生留学制度は、学生全員を対象とする。

ＩＣＴ利用の英語授業外学習システムについては、のべ３００名を対象とする。

［20 年度］1 回生 3 クラス 100 名

［21 年度］2 回生 3 クラス 100 名＋新 1 回生 3 クラス 100 名　＊計 200 名

［22 年度］2 回生 3 クラス 100 名＋新 1 回生 3 クラス 100 名　＊計 200 名

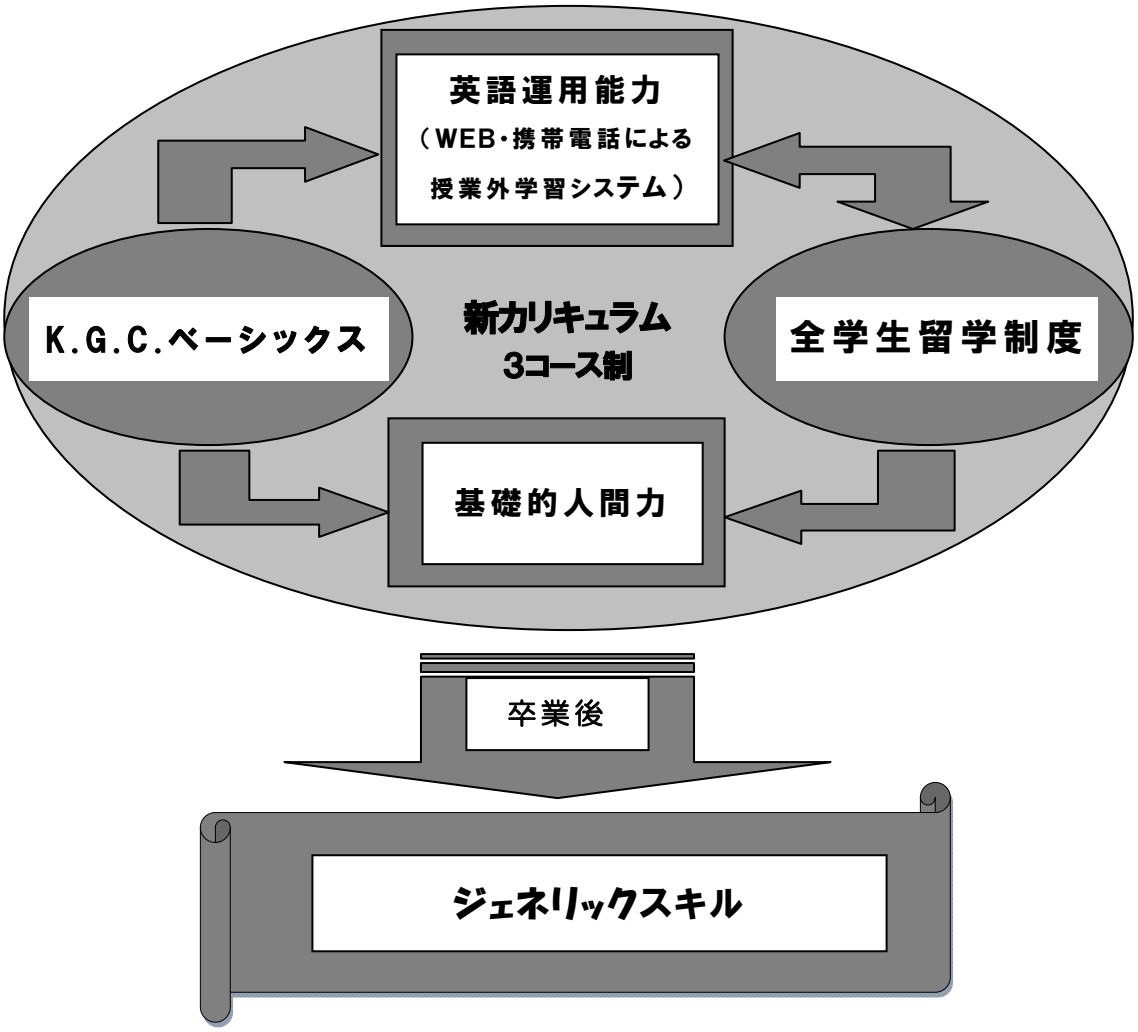
③取組期間終了後の大学等における取組の展開の予定（財政的措置を含む）

本プログラムの取組により、検証し改善された各プログラムを、取組期間終了後も継続して実施し、さらに検証・改善を続けていく予定である。

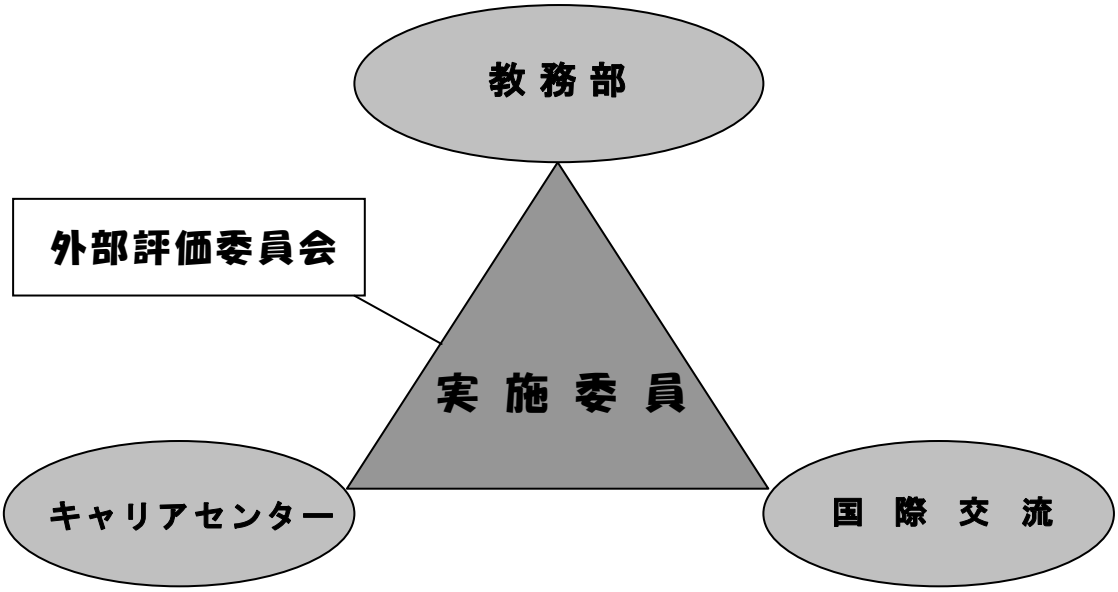
（様式５）

４　データ，資料等

(1) 概要図



(2)【実施体制図】



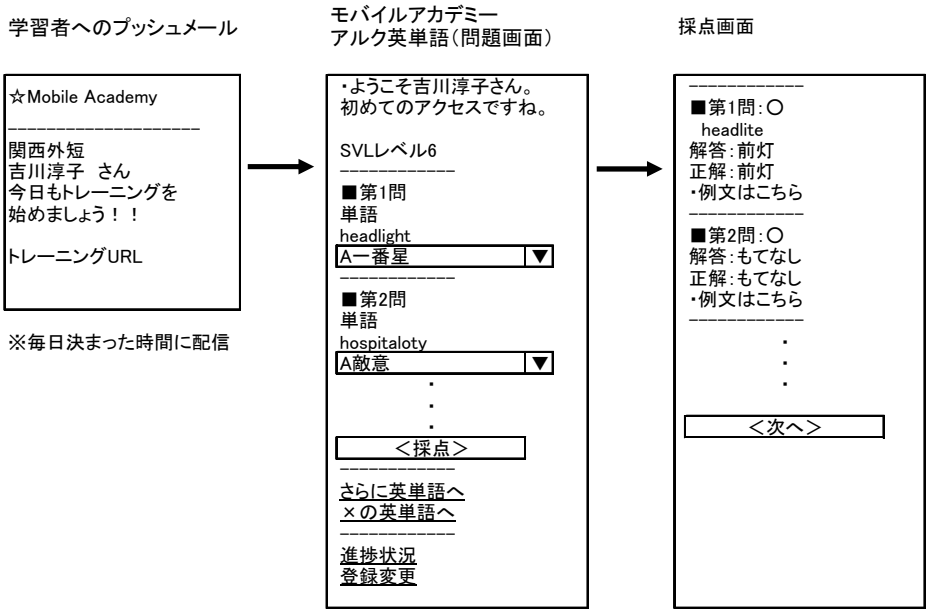
(1) モバイルアカデミーによる携帯電話の学習

画面のイメージは下記の通り。

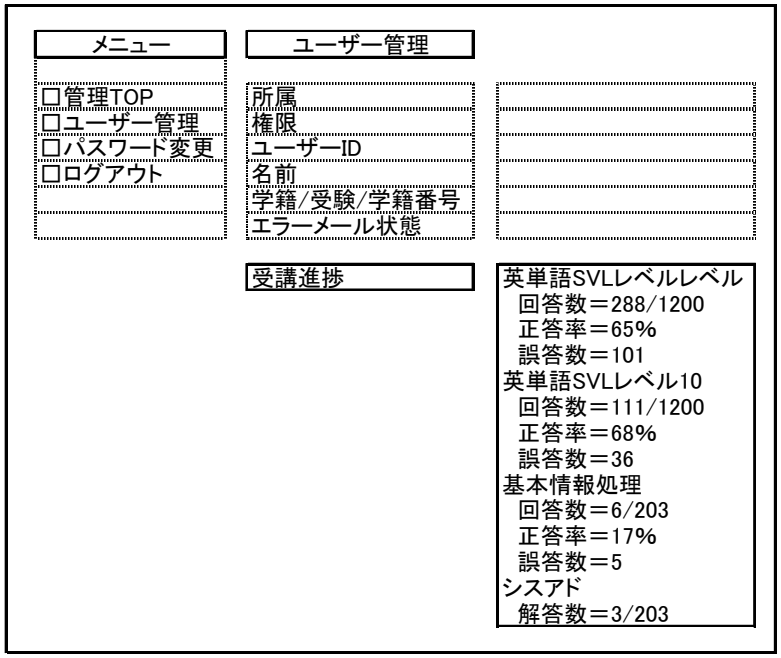
積極的評価が出来る面は、①学習者が進捗度合いに応じて学習レベルを選択できる、②管理画面が多様に用意されていて、教員が個々の学生単位で学修管理をすることができる。

反面、問題点は、携帯の小さな画面で適切な文法問題の設定がうまくできないため、「文法」の問題が設定されていないことである。そのため、本プロジェクトにおいて関西外大の外国語学習のノウハウを活用し、モバイルアカデミーと産学協同態勢をとり、携帯端末で学習可能な文法問題の開発を行うこととし、両者でほぼ合意している。

（学習画面の一部－携帯画面）

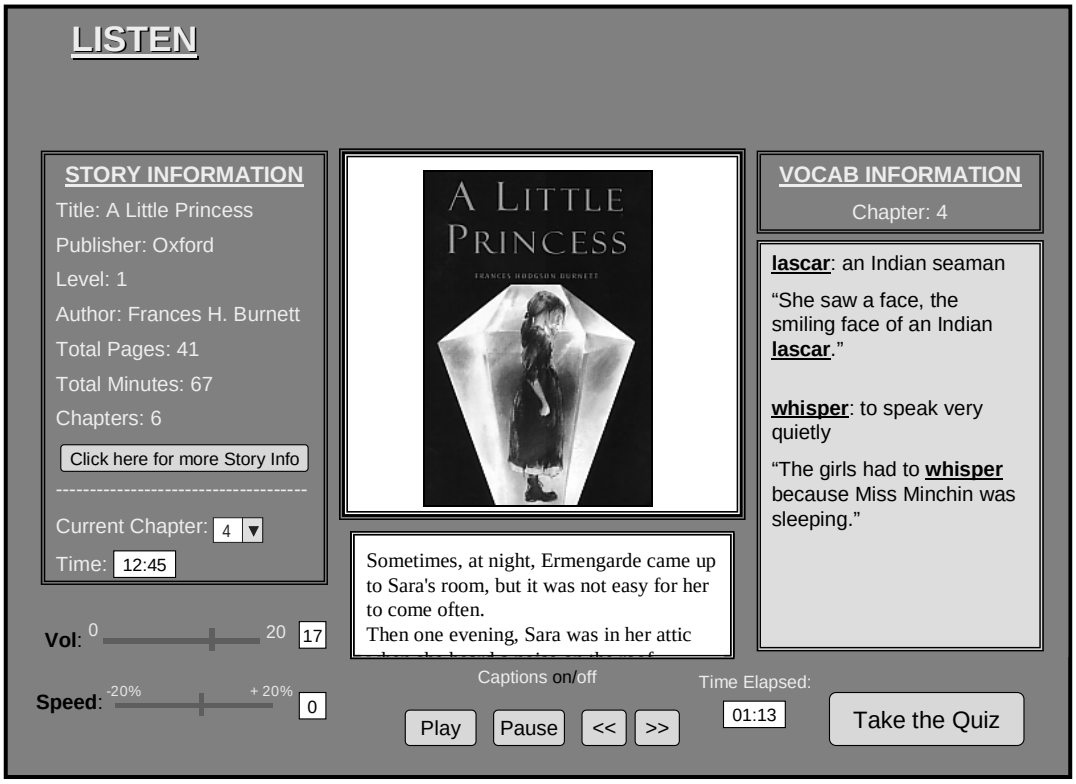


（管理画面の一部－PC 画面）

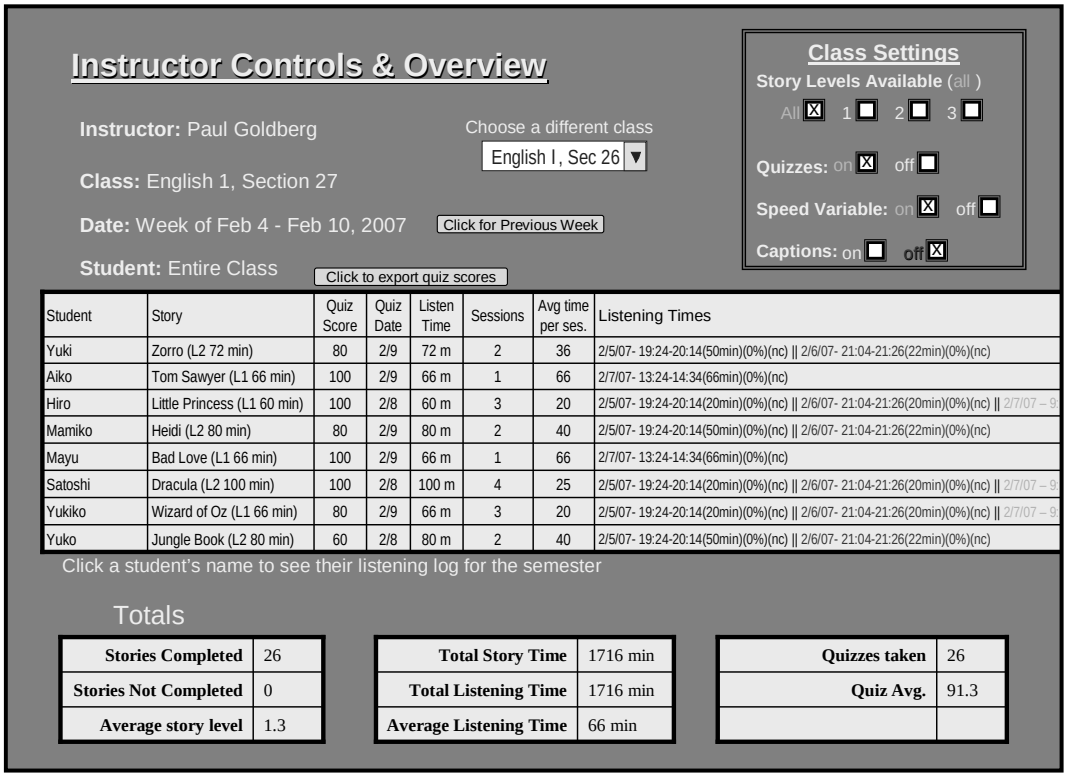


(3)本学教員(Goldberg 講師)が開発中の ICT 活用語学学習システム

(学生用画面)



(教師用画面)



Student	Story	Quiz Score	Quiz Date	Listen Time	Sessions	Avg time per ses.	Listening Times
Yuki	Zorro (L2 72 min)	80	2/9	72 m	2	36	2/5/07- 19:24-20:14(50min)(0%)(nc) || 2/6/07- 21:04-21:26(22min)(0%)(nc)
Aiko	Tom Sawyer (L1 66 min)	100	2/9	66 m	1	66	2/7/07- 13:24-14:34(66min)(0%)(nc)
Hiro	Little Princess (L1 60 min)	100	2/8	60 m	3	20	2/5/07- 19:24-20:14(20min)(0%)(nc) || 2/6/07- 21:04-21:26(20min)(0%)(nc) || 2/7/07 – 9
Mamiko	Heidi (L2 80 min)	80	2/9	80 m	2	40	2/5/07- 19:24-20:14(50min)(0%)(nc) || 2/6/07- 21:04-21:26(22min)(0%)(nc)
Mayu	Bad Love (L1 66 min)	100	2/9	66 m	1	66	2/7/07- 13:24-14:34(66min)(0%)(nc)
Satoshi	Dracula (L2 100 min)	100	2/8	100 m	4	25	2/5/07- 19:24-20:14(20min)(0%)(nc) || 2/6/07- 21:04-21:26(20min)(0%)(nc) || 2/7/07 – 9
Yukiko	Wizard of Oz (L1 66 min)	80	2/9	66 m	3	20	2/5/07- 19:24-20:14(20min)(0%)(nc) || 2/6/07- 21:04-21:26(20min)(0%)(nc) || 2/7/07 – 9
Yuko	Jungle Book (L2 80 min)	60	2/8	80 m	2	40	2/5/07- 19:24-20:14(50min)(0%)(nc) || 2/6/07- 21:04-21:26(22min)(0%)(nc)